

## オニグルミ

- ・ 河原に多い落葉高木。脂肪分を豊富に含み、食用となるクルミを付ける。
- ・ 食害者から種子を守るために、堅い殻を備える。皮にはタンニンが含まれ、素手で向くと手が黒くなる。
- ・ 種子散布方法は、動物散布または、水散布。ネズミやリスが地中に貯食する。これに適応して地下 30 c m くらいまでは埋められても発芽が可能。

## ズミ

- ・ 湿原~草原によくみられる落葉小高木。乾燥化が進む戦場ヶ原や大阿原湿原（入笠山）などで増加している。根の萌芽力が強い。
- ・ バラ科リンゴ属で、果頂にはガクの名残がある。実は渋みがあるがリンゴに似た味。ただし実は直径 8mm ほど。鳥が食べやすい大きさに進化した。
- ・ かつてはリンゴの台木にされ、日本のリンゴ産業を支えたが、今はほとんど使われることはない。



ズミの果の頂部に残るガク

## カツラ

- ・ 雌雄異株の落葉高木。名の由来は「香出ら」、つまり香りの出る木。落ち葉の中でマントールが合成され、わたがしのような香りを発散する。
- ・ 自生のもは溪谷に多い。株立ちすることが多く、主幹を交代し、若返りしながら、延命する。
- ・ 種子は羽をもった小型のもので、風で散布される。

## コブシ

- ・春に白い花をつけるモクレン科の落葉高木。名の由来は、実が手のこぶしに似ていることから。
- ・種子は鳥散布。種子は鳥が見つけやすいように赤い色をしている。また、鳥が種子を食べるときに落下しないように (?)、皮と白い糸でつながっている。
- ・樹木が種子を遠くへ散布しようとする理由はいくつかあるが、親木の下には、種特有の病原菌や害虫がいるので、種子を親の木の下に落とさずに、親木から離れた場所へ散布しようとしている。



種子をぶらさげる白い糸

## アカマツ

- ・日本の代表的な二葉松。クロマツよりも葉が柔らかい。
- ・種子は風散布で、羽をもち、回転しながら飛ぶタイプ。強い風によって1km以上飛ぶという。
- ・球果は雨によって閉じ、乾燥すると開く。
- ・鬼押し出しのような溶岩上でも生育する。マツタケなどと菌根をつくる。
- ・西日本のはげ山の回復を助けた、「かさぶた」に例えられる木。
- ・ここ数十年、マツノザイセンチュウ病による枯死が著しい。受難の時代。
- ・極端な陽樹なため遷移の初期種で、やがて他の種に追い出される宿命。ザイセンチュウ病に加えて、人が松山を利用しなくなったことにより、松山の多くは、多の樹種に乗っ取られた。



アカマツの種子。回転しながら飛んでいく。